
赤き魔王とその娘

斐野那由多

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

赤き魔王とその娘

【Nコード】

N1858A

【作者名】

斐野那由多

【あらすじ】

ザタナスⅡロゼケニーとリーナシエラⅡマジエストは剣術の師弟関係。ザタナスはリーナシエラの養い親でもある。しかしザタナスは生活能力ゼロ、お陰で口喧嘩ではリーナシエラに負けっ放しである。そんな二人のある日の出来事。

1：「……………何のつもりだ、シエラ」

「よオ、“赤の王”。久し振りだな」

煙草の煙漂う酒場で、だらだらとグラスを傾けていたザタナス。ロゼケニーは面倒臭そうにちらと視線を向けた。聞き覚えのある声、忘れようもない気配。その正体に半ば感付きつつ、しかし視界に身なりの良い若い男を収めたザタナスは緩く双眸を細める。

「……………ガンツか。生きてたのか、てめえ。てつきり死んだもんだと思ってたぜ」

平穩に暮らしていれば、特に彼ほどの年齢と健康状態ならば、そうそう関わり合いになることはない言葉。物騒かつ縁起でもない。だが、ザタナス一流の憎まれ口に慣れているのか、若い男は特に表情も変えることなくさっさと椅子に座った。そして親しい者同士特有のざつくばらんさでこちらも物騒な台詞を投げる。

「お前こそな。三年前、お前が叙任式をぶち壊して雲隠れして以来か？ よく五体満足で娑婆にいられるな」

大袈裟に両掌を広げて驚いてみせるガンツ。言葉の内容ほどに驚いてはいないようだ。むしろ、殺されても死なないような相手を目の前にしているかのような、揺るぎない確信が見える。

ザタナスは一瞬片目をすがめてから、ガンツの台詞に直接は答えず、舌打ち混じりにうなった。

「代わりにお荷物押し付けられたけどな」

「うん？」

周囲の喧騒にかき消されたザタナスの言葉を、ガンツは聞き返す。しかしザタナスは視線を流したまま答ええない。その横顔が、彼の知る悪ガキそのまま、ガンツは思わず喉を鳴らして笑った。

「……………はは、王立士官学校を首席で卒業して、その三年後に最年少で准佐にまでなるとこだったのになあ」

「るせえよ、昔のことだ」

不機嫌に眉間に皺を寄せ、ザタナスはグラスをもてあそぶ。

ザタナスとガンツはかつて、王立士官学校の同期生であった。ガンツはその頃からザタナスを「団体行動に向かない男だ」と思っていたが、士官学校を大過なく（小過は河原の石くれ程にもあった）卒業した奇跡から数年、案の定ザタナスは軍隊生活に暴発し、暴れに暴れた上で除隊（というほど穏便ではないが、体面を気にする上層部は飛び抜けて優秀な成績を収めたザタナスに対して懲戒免職という手段を執らなかつた）、地道に幹部候補の道を歩むガンツとは大幅に道を違えて現在に至っている。経歴は似付かない二人であったが、士官学校時代からどういうわけか気が合うのは奇妙なことであつた。

三年ぶりの再会を一方的にセツティングしたのはガンツ。ここまで順調に上がつて来た階級と役職を存分に行使し、三年前に除隊したザタナスはロゼケニー大尉の足取りを追つた。

現役時代も守りより攻め、それも遊撃部隊（身も蓋もない言い方をすると連中からはゲリラ部隊と呼ばれている）の指揮官として突出した能力を持っていたザタナスを見付けるのは、それでも容易ではなかつたが、ガンツは有給休暇を取り、この酒場へとやって来た。ことを大袈裟にしないために派手な動きは避けたが、その痕跡まで殺す程に隠したわけでもない。最初に声を掛けた時のザタナスの態度を見るに、やはりガンツの動きに気付いていたらしかつた。

『魔王』の名を持ち、「赤の王」と呼ばれ恐れられた男の実力は、少なくとも衰えてはいないようだった。

互いが互いの動きに気付いていたことに気付かないふりをしつつの一連の再会劇は、茶番劇にして予定調和。分かるのは、ガンツはもちろんザタナスも、互いに会うことを「悪くない」と思っていたこと。

「なあ、ザタナス」

しかしガンツが本題に入ろうとするのを遮り、二人の掛けたテーブルに影が落ちた。次いで野太い声も落ちて来る。

「お前が“大魔王”ザタナスか？」

挨拶もなしに割り込んで来た男を、ザタナスは凶悪な目つきで睨め上げた。どれほど極道な人生を歩んでいる人間でも一瞬凍り付くと言われる一睨みを受け、それでも男は動揺する風でもなく腕を組み、幾度か頷く。

「その入れ墨、間違いねえな“大魔王”」

あまつさえザタナスの左目の下にある、傷か茨を圖案化したような深紅の入れ墨を指差したのは、肝が太いのか単に鈍いのか判断に苦しむところである。

「てめえ……誰が“大魔王”だ」

ただでさえ気短なことと有名な“赤の王”である。堪忍袋の緒があっさり切れさせゆらりと立ち上がったザタナスの隣で、ガンツがくっくつと笑う。

これは久々に面白いものを見せてもらえそうだと、ガンツは一時事態を静観することにした。彼自身の用件は、それほど急ぐものではない。

「“大魔王”か。随分出世したな、ザタナス」

「黙れ、王立軍将校サマが。てめえは黙って煙草でも吸ってる」

「軍人だと？」

小さく目を見開いて一歩引く男に、ガンツはひらひらと手を振った。

「あー、俺のことはお気になさらず。生憎オフにまで働くほど仕事熱心じゃないんだ」

男は「そ、そうか」と頷き、少々毒気を抜かれた面持ちでザタナスに向き直り、咳払いした。

「“大魔王”ザタナス。最強の剣士の名を懸けて、俺と……」

「今すぐ口を閉じる。これ以上俺をダイヤモンドオウなんつー間抜けな名で呼んだら殺す」

芝居がかった男の台詞を途中で遮り、低く凄むザタナス。男は戸惑ったように首を傾げた。

「は……？ 間抜け？ 敬称じゃねえのか、だいま……」
鋭い殺気に心臓を貫かれ、慌てて口を閉ざす男に、ザタナスは吠えた。

「“大魔王”のどこが敬称だ、腐れ頭が！ 俺と勝負したいんだっ
たな、よしいいだろう、表に出ろ」

『魔王』の名を持つ男の迫力に、男は思わず後ずさった。こちらも鍛え上げられた体を持つ歴戦の剣士である。だが、本性を現した『魔王』は格が違った。それでも男は何とか踏み止まり、顎を引く。

「の、望むところだ」

売り言葉に買い言葉、自分から言い出した手前引くに引けなくなつた男は、内心滂沱の涙を流しながら傍らの剣を取り上げるザタナスを眺めざるを得なかった。先程『魔王』の殺気の前に踏み止まれたのはまぐれに近い。男は本能が「こいつには絶対勝てない」とやかましく騒ぎ立てるのを聞きつつ退くタイミングを探す。

「おやおや」

一人ゆつたりと、ガンツは笑いながらグラスを傾けた。

「ほどほどにしておいてやれよ、ザタナス。我らがミグダルガド王国の前途を担う大切な若者なんだからな」

男の目が「そう思うんなら止めてくれ！」と訴えているのに気が付きながら、ガンツはさりと無視した。男はおそらく二十歳を超えるか超えないか年頃だろう。それなりの技量を持ち、それが故におのが腕に慢心する典型のような若者だ。この辺でザタナスにがつんとプライドをへし折られ、上には上がいることを知っておいた方が男のためにも彼の周囲の人間のためにも良いだろう。……ガンツが知る限りザタナスは最高峰、彼より上の人間にはお目にかかったことがないが。

「行くか。ほら遠慮すんな、先に行け。それとも俺の後ろについて不意打ちでもするか？」

「ばっ……誰が……！」

反射的に言い返した男の目の前で、ザタナスの左手が閃いた。男

は思わず右腕を上げて顔をかばう。次の瞬間、男はザタナスの左手がいつの間にか抜き身の白刃の切っ先を掴んでいるのを見て仰天した。

「な、な……」

剣は背後から男のすぐ脇を通り、真っ直ぐザタナスを指している。“赤の王”は口をぱくぱくさせる男を素通りする、胡乱な視線を投げた。

「……何のつもりだ、シエラ」

ずっと白刃が引かれ、かちんと鞘に納める音がした。それに行動の呪縛を説かれ、男はようやく背後を振り向く。そして、再び声を失った。

紅蓮の髪、紅蓮の瞳、細い身体、卵形の顔。

こんな場所にはあまりにも健全な少女だった。

「それはこつちの台詞です。こんなところでいつまで油売ってるんですか、師匠」

「師匠？」

思わず声を漏らしたガンツとザタナスを交互に見、少女はにっこり笑った。

「師匠のお友達ですか？ 初めまして、私はリーナシエラ＝マジエスト。ザタナス＝ロゼケニー師匠の弟子です」

リーナシエラと悪友に共通点を見出せなかったガンツは、師弟関係と聞いていよいよ首を傾げる。

「弟子……何の？」

「剣術です」

言われてみれば、簡潔に答えたりリーナシエラは腰に剣を帯びているし、先程の抜き打ちも、本職のガンツが見てもため息が出るような鮮やかさだった。それに何より、

「ザタナスに剣以外のことが教えられるわけがないな。……いや、済まない。俺はガンツ＝マスグレイヴ。ザタナスの親友だよ」

「ハ、単なる腐れ縁だろ」

「そりやもちろん。今のは嫌がらせだよ」

「……相変わらず食べねえ奴だな」

「お褒めにあずかり恐悦至極」

そんな二人の様子を見ながらリーナシエラは口元に手を当て、くすくすと子供らしく笑った。そしてあまり子供らしくない分析結果を告げる。

「仲良しなんですね」

「誰がだ！ シエラ、お前こんなところに何しに来た」

少なくとも現時点で比べれば、リーナシエラよりザタナスの方がよほど子供らしかった。声を荒らげるザタナスに全く臆することなく、この場で唯一の少女は真っ直ぐ師匠を見やる。

「師匠を迎えに来たんです。仕事終わっただけでしょう？」

ザタナスはリーナシエラが差し出した手をぺしっと叩いた。

「……何だこの手は」

「今日の仕事のほ・う・しゅ・う、です。全部渡せとは言いませんから、半分出して下さい」

「何でお前に渡さなきゃならん」

「とぼけないで下さい！ 前回と前々回のこと、あたしはきっちり覚えてますよ！ せっかくのギヤラを一夜でほとんど使っちゃったのは誰ですか！」

「……俺は宵越しの金は持たねえ主義なんだよ」

「なら今回は問題ないですね。まだ宵越しじゃありませんから」

「……前も生活費は残しといたろ」

「師匠、うちにどれだけ借金あるか分かってないんですか？」

「あー……どれだけあるんだ？」

段々やり込められ、追い詰められていく悪友の前に、ガンツはいっそ荘厳な感覚を覚えた。あのザタナス「ロゼケニー」が。同期どころか上官からのしごきや嫌味にも、常に余裕と反骨を以て対応どころか容赦なく倍返してやり返していたザタナスが。

当時のザタナスを知るガンツにとって、これは既に伝説の中のもの

うな光景であった。

やり込めている張本人が十歳にもならぬほどの少女だと言うことを勘案してしまうと、一挙にザタナスが哀れになって来るが。

「……帰ってから教えてあげますから。取り敢えずお金先に出して下さい」

ザタナスは舌打ちし、ずしりと重い革袋をリーナシエラに放る。

そして腰の大剣を確かめ、出口に向かって足を踏み出した。慌てて男が道を譲る。

「帰るぞ。シエラ、払っとけ」

「師匠！……あの、失礼します」

ガンツと男とにぺこりと頭を下げ、リーナシエラはさっさと先行くザタナスの後を追った。そのザタナスは、不意に足を止めて振り返る。

「おい、そのガキ」

「……え、俺？」

立ち去るタイミングを逸していた男が、間の抜けた声を漏らして自らを指差す。ザタナスは構わず続けた。

「俺に喧嘩売るには百年早い。お前よりまだこの」

と、リーナシエラの赤毛に右手を載せ、

「シエラの方が強いぞ。俺と勝負したかったらまずこいつを倒すんだな」

言うだけ言うと、ザタナスは何事もなかったようにきびすを返し、リーナシエラを伴ってすたすたと歩き去ってしまった。

「弟子、ねえ……魔王と呼ばれた男が随分丸くなったもんだ。あんなやり方でもあの時軍を抜けたのは、幸せだったのかな、あいつにとって」

ことごとくグラスを置き、ガンツは呟いた。ポケットの中の書類をぐしゃりと握り潰す。

弟子持ちの魔王に、こんなものは似合わない。

数年来の腐れ縁と再会出来ただけで 叱責の対価は充分だ。

2：「家事と家計握ってるのはあたしよ」

「まったく、何が『師匠』だ、気色悪い」

猫被りが、と毒突く剣の師に、リーナシエラは紅蓮の瞳を向ける。
「あたしはザタナスの体面を気にしてあげたのよ。たった九歳の小娘に呼び捨てにされてるなんて、ザタナスの評判が下がったら家計に響くもの」

「なら公衆の面前で俺から金を巻き上げるのはどうなんだよ、そっちのがよっぽど評判に響くぜ」

「だってその方がザタナスとあたしのためだもの。あたしは生活費を手に入れる、ザタナスは周りに証人がいっぱいいるお陰でちゃんとあたしにお金を渡したって証拠が得られる。あたしからまたお金を要求される心配はないし、食費があるからちゃんとご飯が食べられる。万々歳だわ」

「……てめー、どこでんな屁理屈覚えて来んだよ」

「どこでってその辺だよ。そんなに簡単に商人さんの口車に乗ったらずくに丸裸にされちゃうもの、嫌でも覚えるわよ。て言うか、不満ならザタナスが行って来てよ、買い出しとか」

陽は既に半分以上沈み、街路には火が灯っている。スラムと廃街の中間あたりにある家へと帰る道すがら、師弟はだめ父としっかり者の娘のような会話を交わしていた。

廃街は、街の西側に広がるスラムの更に外側にある。元は中下級労働者層が住んでいた区域であったが、現在では文字通り廃棄され、住む者もいない。

特に夜は、足を踏み入れる者さえいない。

廃街は、なぜ廃棄されたのか。

それは夜、スラムのうちでも西側で、耳を澄ませていればすぐに分かる。

幾種類もの吠え声が、雄叫びが、悲鳴が。

犬猫ではなく、ましてや人でもない。

魔獣。夜の支配者が、互いに縄張りを争う声だ。

スラムの住人は廃街との境に高い壁を築き、夜にはその内側で身を縮める。

廃街が、これ以上広がらぬように。

そんな、「住んでいた者達を魔獣が全て食い殺してしまったから廃街は出来上がったのだ」という話がまことしやかに囁かれる地向かって歩きながら、ザタナスはもちろんリーナシエラにも恐怖の色は全く見えなかった。

「ほんつと信じられない！ 何で仕事終わってからの数時間で報酬が半分以上もなくなってるわけ？」

ガンツの前でのものとは全く異なる態度でリーナシエラはザタナスを睨め上げた。ザタナスは切れ長のグレイの瞳でリーナシエラを見下し、ふんと鼻で笑う。

「『半分出して下さい』、だろ？ 丁度いいじゃねえか」

「あんなのあの場を凌ぐためだけに決まってるじゃない！ 帰ってからもう半分も出させるつもりだったのよ！」

「……お前、さっきと言ってること違うぞ」

「借金の額も一月の生活費も知らない人に言われたくないわ！ 今度から報酬は最初に全部あたしに渡して、絶対に！」

「稼いでんのは俺だぞ」

「家事と家計握ってるのはあたしよ」

「てめえ、日に日に口が減らなくなるな」

「お陰様で」

「……ったく、えらいガキを押し付けてくれたもんだ、クラウデン
「ディアンも」

口での勝率が段々下がりつつあることはザタナスも自覚していた。癪なのでため息はつかないが、昨年までこの地域の行政長官を務めていた男に文句を吐く。

三年前、クラウデン「ディアンは追われる身だったザタナスを見

逃す代わりに、スラムの重し役とある事件で親を亡くした子供のお守り役を課したのであった。

「ま、そっちもお陰様で、ってところね。ディアン様とザタナスがいなかったら、多分あたし今生きてなかったもの」

当の子供・リーナシエラがザタナスの文句を聞き付けて口を挟む口が減らないガキではあるが、スラム育ちであるにも拘わらず、時に直情すぎる程真っ直ぐな質は損なわれていない。

「そう思うんならちったあ俺を敬えよ」

「敬ってるわよ、でもお金のことについては話が別だからね」

剣の素質といい、希有な娘であるとは思うがやはり自分は子守には向いていない、とザタナスは思った。

スラムに睨みを利かせて派手に名を挙げようとする者を抑える、という役割はまだいい。下手に住居を移せなくなっただけで、さしたる不便はない。

けれどリーナシエラの面倒を見るといっては第一、他人に気を使って生活することそのものが向いていないのだ。士官学校と合わせて五年間の軍隊生活は、我ながらよく保ったと思う。そんなザタナスに子守が向いているわけがない。

自分に向けられる剣呑な気配を察し、意識し続けることとはわけが違う。

黒い影が視界をよぎった。
複数。

そのうちの一人がザタナスを突き飛ばそうとするのを、自分から後ろに下がって避ける。

すぐ横にいたリーナシエラの気配が遠ざかり、間に別の気配が割り込んだ。

「ふわっ!？」

リーナシエラがぐもった声を上げてから数瞬の後。ザタナスと、リーナシエラと、念のためのように顔を隠したちんぴらっぽい男が四人。計六人が取り敢えずの立ち位置を定め、対峙した。

「……様あねえな、シエラ」

男二人が左右からリーナシエラの肩を押さえ込み、ご丁寧にそのうち一人が首元にナイフを突き付けている。残り二人はザタナスとリーナシエラの間立ち、こちらに向けて殺気を大盤振る舞いしていた。

「……うるさいわね、まさか本当に手出してくるとは思わなかったのよ」

「その油断が命取りつてやつだ。まだまだだな、シエラお嬢ちゃん」
「油断じゃないわよ、だって普通あんなに殺気丸出しの人が本当に襲つて来るなんて思わないじゃない！」

「それを油断つっーんだよ、残念だったな」

人質に取られた九歳の弟子とその師匠の会話とは思えないやり取りに面食らったか、男達は少し目を見開いてリーナシエラとザタナスを交互に見、そして見せ付けるようにナイフに力を加えた。

「黙れ、下手に口開いてみる、このガキの頸動脈かつさばくぞ」

ザタナスが口を閉じたのはありがたいご忠告に従ったからではなく、彼らと話すのが面倒臭かったからである。加えて、リーナシエラのミスに助けられているとはいえ、珍しく言い合いで弟子の優位に立っていたのだ。ここは是非勝ち逃げをしておきたい。

(……面倒くせえな)

生憎恨みを買う理由は山程あって、いちいちどの理由で襲つて来たのかなど考えてはいられない。リーナシエラを人質にするなどという無駄な真似をしているところから見ても、常連やこの周囲に住んでいる輩ではないということは分かるが、その程度で絞り切れるのならとつくに元から遺恨を断っている。

(いっそ、問答無用で殺つちまうか)

持ち前の短気を発揮して“魔王”が物騒な方向に流れかけた時、近くの廃屋から男が二人出て来た。

「計五人、か。よう、御老、物々しいこったな」

柄に掛けかけていた右手を戻し、ザタナスは不敵に笑う。

後から出て来た二人は先の四人とは趣を異にしていた。一人はザタナスと張る程に体格のいい男。ただしこちらは一見動きにくそうなほど上質な衣服を身に着けており、しかもそれが浮いていない。もう一人は六十に近いと見える初老の男。この場にいる誰よりも金持ちそう、という言葉が彼を表すに最も適切に思える。一触即発のこの場にあるのが全く以て似合わない。

「ふん、傭兵風情とWSを一緒にするな。如何に貴様だろうと愛娘を人質に取られた上では二対一で充分だろう」

「誰が誰の娘だ！」

ザタナスとリーナシエラの声が期せずして唱和した。

「俺はまだ二十四だ！ あんなでけえガキがいるほど年じゃねえ！」

「そうよ、あたしは娘じゃなくてザタナスの弟子よ！」

ぎゃんぎゃん騒ぎ立てる師弟ににんまりと唇を歪め、初老の男は「娘だろうが弟子だろうが構わん」と言い放った。

「ここ数日で貴様がその娘を大切にしていることは分かった。娘の安全と引き替えなら“赤の王”の剣は簡単に折れ砕けるだろうこともな」

あんまりと言えばあんまりな言葉に、ザタナスは笑うのも忘れて絶句した。リーナシエラの方はと言えば、声を張り上げかけて、目の前にちらつかされたナイフと師匠を見比べて押し黙る。

「ふん、やはりな。“魔王”も人の子か」

師弟の態度を肯定と判断し、初老の男は鼻を鳴らした。WSと呼ばれた男は彼の一步後ろに控えたまま微動だにしない。

（お抱え護衛つてとこか。……シエラにはちつと荷が重いか）

WSの実力の程度をそう判断し、ザタナスは一度大きく息を吐く。「おい、ジエイクソン」ウェブリーズ。メルディシニア屈指の大商人が、ビストレンのスラムくんだりまで何の用だ？」

尋ねると、リーナシエラが小さく「メルディシニア！？」と声を上げたのが聞こえた。令名高きミグダルガド王国の王都。メルディシニア屈指の大商人とは、つまり地名をミグダルガドに入れ替えて

も成立する。

「ほお、わしを覚えていたか。ならばわしから借りた金のことも覚えていられるだろうな」

ウエブリーズ商会の会長は片頬で笑ってザタナスを睥睨した。

「元金百ポーラ。利子を合わせれば、ざっと百五十は超えている」「覚えてるさ。全く高利貸しってのはいい商売だな」

百五十ポーラ。ほとんど年収と同じじゃないの、という憤怒の視線を背中に感じながら、ザタナスは「そんなはした金」とうそぶく。「あんたにとつちや小指一本で動かせる金の何十分の一だろ。わざわざあんたが回収に来るまでもねえ」

「弁済期をとくに過ぎて何の音沙汰もない不良債務者が、かの名高き“赤の王”だと知ってな。一度お目にかかっておくのも悪くないと思ったのだよ」

「で、あのクソガキを人質に取るのも悪くないと思いましたか？」
ストレートな皮肉に、けれどウエブリーズは動じない。それどころか鷹揚に頷いてみせた。

「有り体に言えばな。こうでもしなければまともに話も出来んだろう」
「う」

「話ね」

買い被りすぎているウエブリーズに、思わず苦笑が漏れる。それを了承の合図と見たらしく、ウエブリーズは『話』を続けた。

「先にも言ったが“赤の王”の有名は知っている。恐るべき“魔王”が方々に借金をしていることもな」

なぜそんなことを知っている、とは訊かない。貸金業を営む者の間では、客の情報は筒抜けだということはよく知っている。

「返済の実績がほとんどねえ奴に貸す方が馬鹿なんだよ。部下はよく指導した方がいいぜ、御老」

茶化しただけのつもりだったが、ウエブリーズは我が意を得たりとばかりに身を乗り出して来た。

「そう、今や貴様は専門用語で言うところの立派な多重債務者だ。」

取り立てもさぞ厳しかろう？」

「いや？ シエラの丁度いい実戦訓練になったぜ」

「あたしはやりたくないって言うてるのに」と抗議を漏らすリーナシエラを債務者債権者双方とも無視する。

「しかしいつまでも取り立てを追い払ってばかりではいられない？」

「それをこの俺に言うか。……結局何が言いてえんだよ、ジエイクソン」ウェブリーズ」

「つまりだ」

商人一流の駆け引きに業を煮やしたザタナスは直截に結果を求め、ウェブリーズは主導権を握った余裕でにやりと笑んだ。

「貴様の全ての借金をウェブリーズ商会在肩代わりしよう、ということだよ」

ザタナスの表情は変わらない。

「で？」

「で、とは？」

「あんたはその見返りに何を望むんだ？」

全てを肩代わりなど、慈善家でもあるまいに、この男がそんなことを発想するわけがない。その金額を補って余りある何かを、ザタナスに期待しているに決まっている。

「何のことはない。貴様のその力と名前をウェブリーズ商会のために役立てて欲しいのだよ」

まあそんなとこだろうな　とザタナスは垂れ気味の目を細める。でなくばリーナシエラを借金の形に売り飛ばす、このどちらかだろうとは思っていた。と言うよりも、他に金銭的価値のある持ち物などほとんどない。家屋丸ごと差し押さえようが、たかが知れている。貴様が今やっていることとそう変わらない、仕事がウェブリーズ商会から来るといっただけでな。悪い条件ではあるまい」

ポーカーフェイスの中にも確信的な期待が感じられる。ザタナスはゆっくりと笑ってみせた。

「埒外だ」

一音一音区切るようにはつきりと即答する。

「金輪際、俺は誰かを上に頂くつもりはないね」

音という音が全て沈殿したような沈黙。

一瞬後、「てめえ！」と声上がる。

「大事な人質のことを忘れてんじやねえか？」

これ見よがしにリーナシエラの喉元のナイフをちらつかせ、彼らはザタナスを睨め付けた。

「弟子の命が惜しけりや」

「シエラ」

傭兵の言葉を遮り、ザタナスはリーナシエラの名を呼ぶ。

「もついいぞ」

2:「家事と家計握ってるのはあたしよ」(後書き)

本当は「弁済期を過ぎる」じゃなくて「弁済期が到来する」が正しいんですよ……

雰囲気上「過ぎる」を使ってしまうましたが、一応こちらが正しい使い方です、ということまで。

3：「切っ先が下がってるぞ、不肖の弟子」

「はい」

リーナシエラを取り押さえていた傭兵達は、いつの間にか腕に少女の感触がなくなっていることに絶句する。急いで目を上げると、傭兵のうち残り二人が、赤い炎に斬り伏せられるところだった。

炎が 炎のような深紅の髪を持つ少女が振り返る。その紅蓮の瞳に射抜かれ、戦慄する。二人の傭兵は慌てて武器を構え 次の瞬間、両腕に鋭い痛みを覚えて剣を取り落とした。目の前には、いつの間け間に間合いを詰めたのか、傭兵達が隠れていた雑木林の方へ剣を蹴り飛ばす少女の姿。

「まだ、やる？」

彼らの血に濡れた細身の剣を片手にぶら下げ、自らが両腕を斬り裂いた男達に向かって、ほとんどあどけない笑みを向ける。

戦女神。

なぜか死神という連想は働かなかった。しかしそれで充分だった、彼らが首を横に振るには。

「そう。だったら邪魔しないでね、あたし達のこと」

言うだけ言っただけで血振るいした剣を鞘に納め、少女はくるりと背を向けた。先に倒した二人の側にしゃがみ込むと、同じことを言う。

二人はようやく起き上がると、足を引きずって仲間の方へ歩いて来た。こちらは両腕のみならず両足をやられている。

「誰の剣が折れ砕けるって？」

大の男四人が一人の少女によって、ほぼ一瞬にして無力化されたことの衝撃から逃れ切れないウェブリーズとその護衛に、ザタナスはくつくつと笑いながら言葉を投げる。

「あいつが人質にされようが何だろうが、俺の剣が折れることはあり得ねえ。必要ねえからな」

「しかし……こんなことが……」

WSが初めて口を開いた。自身優れた腕を持つ彼には、リーナシエラの身のこなしが理解出来たのだろう。そしてその分シヨックも大きい。

「いるところにはいるもんなんだよ、天恵を持つ奴つてのはな。そしてそれはお前じゃねえ」

リーナシエラの場合、全身の関節の可動範囲が常人離れして広い。関節の可動範囲を広げることは訓練次第ではもちろん可能だが、彼女は生まれ付きそれを得ている。剣を始めとする武術の素質と共に、天性の才能だ。

戦うために生まれて来たと言っても過言でない子供だ。

「さて、どうする、ジェイクソン」ウエブリーズ。引き下がるか、それとも」

言いさして、ザタナスはふと言葉を切った。目を上げて背後を振り返る。

「逃げる」

表情をわずかに硬くして言う。

「てめえらに言っただよ、ウエブリーズ。早く……」

「ザタナス！」

気付いたらしく、リーナシエラが駆け寄って来る。彼女の表情にも余裕はない。

「ああ。間違いねえ。お前はあいつらを」

肯定して顎で傭兵達を示すと、リーナシエラは頷きつつきびすを返した。道端に座り込んでいる男達を叱咤し、ウエブリーズとWSが隠れていた廃屋へと追い立てる。

「お前らも早くしろ、命が惜しく」

「あれは……ヴォルフレイド!？」

廃街方面から続々と姿を現したえんじの毛並みの獣を見、WSが目をむく。姿は形は犬の一種に似ているが、体格は熊並み、前述のえんじの毛皮は、触れれば人の肌を焼く高温を宿している。

すなわち、魔獣。その定義は、人智を超えた動物。

犬ほどの素速さはないことが辛うじて救いだが、それでも一般人に相手が出来る生き物ではない。性質は、好戦的にして縄張り意識が強く、縄張りの内に敵がいれば容赦なく殺戮する。

それが、およそ六頭。

「……城壁を越えたのか。救えねえな」

「ここは私が食い止めます。旦那様はお逃げ下さい！」

叫んだWSがザタナスの前に飛び出し、背後に吊っていた剣を抜く。その構えにヒュウ、と口笛を吹く真似をすると、ザタナスは乱暴にウエブリーズの肩を掴んだ。

「優秀な護衛もああ言ってることだ、奴の犠牲を無駄にしたくなかつたら早くしろ」

ヴォルフレイドの実物を見たのは初めてらしく（本来ミグダルガド王国では辺境の一部にしか生息しない）、ウエブリーズは目を見開いたまま視線を外せずにいる。ザタナスは彼の肩を押し、廃屋に押し込めた。

「ザタナス」

「今んとこ誰も死んでねえな。WSは時間の問題だろうが」

WSは既にヴォルフレイドの群れと接触したようだ。剣戟の音と獣のうなり声が同じところから聞こえて来る。

「ザタナス、あたし」

「動くな」

剣の柄に手を掛けた弟子を鋭く制す。

「だって、あの人」

「お前は黙ってる。……交渉するのは一対一でやるもんだ、なあ、御老」

「……何が言いたい」

「あんだとWSとそこに転がってる傭兵ども　六人の命をいくらで購うかってことだよ」

「！　貴様っ……！」

「ぐあッ！」

ウェブリーズが顔色を変えた時、WSの悲鳴が重なった。
ザタナス以外の全員が、既にガラスも砕け散った窓の向こうに目をやる。

「ふん、意外と持たなかつたな」

買い被りすぎたか、と唇を歪めるザタナスに、リーナシエラはきつと険しい視線を向けた。

「ザタナス！」

「シエラ、援護して来い」

「え？」

あつさりと言ったのはザタナスで、リーナシエラは訝しげな声を出す。

「ただしあくまで主役はWSだ。奴もヴォルフレイドも生かさず殺さず程度にやれ」

「何よそれ」

「文句があるなら行かないでここにじつとしてるんだな」

「……行くわよ！」

憤然と言い返すと、少女は外に飛び出して行った。

「どついつつもりだ」

「奴が死んだら五人分になっちまうだろう？」

全く悪びれず、ザタナスは笑む。

「ただ働きはしねえ主義なんだよ」

「……こんな時にまで主義を貫くか」

足元を見おつて、“魔王”が、とウェブリーズは吐き捨てた。

「WSさん、動き止めないで！ 辛かったら一旦下がって……ザタナス！ そろそろWSさんがっ……！！」

外から聞こえる、切羽詰まったリーナシエラの声。「あのガキ、主役はWSだつただろうによ」とさほど不機嫌でもなく呟き、ザタナスはドアを指差す。

「ほら、早くしねえと優秀な護衛様がやばいらしいぜ？」

「……百ポォーラ出そう」

苦々しげにウェブリーズは長身のザタナスを睨め上げる。貸し金の元金と同額。メルディシニア屈指と謳われる大商人には屈辱的だったろう。最初から上限額を提示するなど、交渉術としては下の下だ。それだけ、護衛の身を案じ、事態の早い解決を望んでいたというのに。

「二百出せ」

“魔王”はその意図を汲む可愛らしさなど全く持ち合わせていなかった。

「二百だと……!? 貴様……」

「二百。譲らねえぜ。交渉決裂か？ 俺とシエラ二人ならあの程度のヴォルフレイドの群れ、いくらでも斬り抜けるってことを忘れんじゃねえぞ」

『蹴散らす』ではなく『斬り抜ける』。その背後にウェブリーズらを置き去りにして。生き残った魔獣どもがどちらを殺戮の対象にするかなど、分かり切っている。

顔をしかめて舌打ちし、ウェブリーズは譲歩する。

「百二十でどうだ」

「二百」

「……百二十五」

「二百」

「……百三十」

「二百」

「……貴様っ……少しは譲歩したらどうだ……!」

「に、ひゃ、く、だぜ、ジエイクソン!!ウェブリーズ。譲らねえっ
つっただろ」

「……百四十!」

「二百」

「……」

「……」

怒りと焦燥で顔を紅潮させるウェブリーズとは対照的に、ザタナ

スは悠然と腕を組み、白髪交じりの頭を見下ろす。
その間にも、外からは間断ない戦闘音が聞こえて来る。

「……………」
ガンツ！ とウェブリーズは手近にあった古ぼけた木製の椅子を蹴り飛ばした。

「ああ分かった、飲もう、二百出せばいいのだろう!？」

「そうそう、それでいい。いい選択したな。口約束だからって反故にすんじゃないぞ、ウェブリーズ商会会長さんよ」

ザタナスはにんまりと笑うと、憤激のやり場を探しかねているウェブリーズの手を取り、無理矢理握手した。そしてきびすを返し、近所へ散歩に行くような気軽さでドアを開け放つ。

「切っ先が下がってるぞ、不肖の弟子」

「……………遅いわよ、……………ザタナス……………」

混戦の合間にぼつかりと空いたわずかな空隙。魔獣と睨み合いながら、リーナシエラは肩で息をしつつ答える。彼女がかばうように立った後ろには、地面に突き立てた剣を支えに立つWSの姿があった。恐らく彼自身のものだろう血にまみれ、既に戦える状態ではない。

「てめえはご主人様のところに行つとけ、WS。ここから先は俺達の仕事だ」

「……………しかし……………」

「足手まといだって言わねえと分かんねえのか？」

「WSさん、ここは大丈夫ですから。早く戻つて下さい」

リーナシエラにも重ねて言われ、WSは心を決めたようだった。震える手で剣を鞘に戻す。

「……………濟まない、そうさせてもらう。……………よろしく頼む」

弟子の隣に並んだザタナスは、大剣を抜いて笑う。

「頼まれるまでもねえよ」

目の前には、魔獣ヴォルフレイドの群れ。リーナシエラとWSの奮闘によって、ほとんど全ての個体は大なり小なり傷を負っている

ようだ。

触れると火傷する毛皮は厄介だが、要は直に触れなければいい。

「六頭……二分つてところか。行くぞ、シエラ」

それからザタナスは宣言通り二分でヴォルフレイドを片付け、ウエブリーズを市街地まで送って行くという、『魔王』にしては驚異的に気の利いたことをした。

しかしそこでウエブリーズとの『交渉』の内容をリーナシエラに知られ、「あんな時によくもそんなこと！」とこっぴどく叱られる羽目になるのだが、それはまた、別の話である。

3：「切っ先が下がってるぞ、不肖の弟子」「(後書き)

最後まで読んで下さり、ありがとうございます。
よろしければ感想を頂けると嬉しいです。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1858a/>

赤き魔王とその娘

2008年11月7日07時09分発行